

桃の節句が過ぎ、桜は蕾の中で芳醇な春の色を育てています。この春の息吹は、卒業生の門出を祝うかのように、この武蔵野の地に吹き込んでいきます。

ここに、成蹊高等学校第七十三回卒業式が無事挙行できますことを、皆様方に心より感謝申し上げます。

本日はご多用にもかかわらず、成蹊学園学園長亀嶋庸一様、本校前校長成蹊小学校長跡部清様、本校PTA会長長川口玲奈様、本校PTA副会長渡邊美智子様のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。

また、感染症対策のため、別会場にて参加して頂いております保護者の皆様方におかれましては、三年間にわたる学校生活を修了し、新しい生活に胸を膨らませている

お子様の晴れの姿を目の当たりにして、お喜びもひとしおのことと存じます。本校にとっても、成長したお子様たちの姿を、今ここに御見せできますことは、我々教職員にとってこの上ない喜びでございます。画面越しではございますが、本当におめでとうございませう。

そして、先ほど卒業証書を授与しました卒業生三一九名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは今、この晴れの舞台に立ち、本校で過ごした時間を思い出すと共に、これから始まる新しいステージに向けて、大きな夢を膨らませていくことと思っております。

皆さんは、成蹊高等学校の生徒として、本学園の建学の精神である「個性の尊重」「品性の陶冶」「勤労の実践」を胸に、日々精進して

きました。

これに加え、後輩たちの範となつて、学業、学校行事、部活動などを牽引すると共に、地域からの信頼も得てきました。未曾有のパンデミックが起こる中、日常とは違う形であつても、自分たちで考え、工夫して、蹊祭や体育大会を実現させた姿には、頼もしさを感じました。

また、学年の仲間達とは、何事にも一丸となつて取り組むと共に、常に切磋琢磨しあい、お互いを高めあつてもきました。部活動内に限らず、他のクラブまで応援しあう皆さんの姿勢は、きつと後輩に引き継がれていくと確信します。

この四月から始まる新生活の場でも、本校で培った力を如何なく発揮することを期待します。

ある作家は、本学園の建学の精神と同様のことを若者に訴えかけています。

『君たちに、大人になっても守り続けて欲しいものがある。それは子供のころからずっと、君たちが大切にしてきたものだ。好きな音楽でも、本でも、友達でもいい。ランニングが好きなら、走り続ければいい。大切なものを手離せば、君自身を失うことになる。それが君の個性だ。』

作家は、今まで大切にしてきた自分の個性を手放さないで欲しいと訴えます。しかし、個性だけを大切にすることに警鐘も鳴らしません。

『自分一人が良ければいい生き方は、ダメなんだ。大切なのは品

性だ。一つ一つ学んでいけば、いつか誰かのために生きることができる、素晴らしい自分に出逢えるはずだ。自分にできるかって、勿論できる。君には時間がある。この平等に与えられた可能性を信じて、進むんだ。』

作家は、自分の個性だけではなく、「品性の陶冶」も兼ね備える両方の心を持つことの重要性を説いています。皆さんは、こうした本学園の建学の精神を忘れず、本日もここを巣立って行くのです。

本校からの旅立ちに際し、松尾芭蕉の句を贈ります。

行く春や鳥啼き魚の眼に涙

この句は芭蕉が「奥の細道」の吟行を行うに当たり、矢立初め、つまり初めて詠んだ句です。芭蕉

は、「奥の細道」の出発地である奥州街道の千住宿で、多くの人達に見送られる中、先ほどの行く春や鳥啼き魚の眼に涙と詠んだのです。

「春が行ってしまうのだから、人のみならず、鳥が鳴き、魚までもが、涙を浮かべて別れを惜しんでいる」
と自分と他者の両方の心境を描写してみせました。

芭蕉は三千里に及ぶ「奥の細道」の旅立ちに際し、様々な形で今まで自分を支え、見送ってくれた人達への感謝の気持ちを込めてこの句を詠んだのです。

数年前、ハーバード大学大学院の卒業式に於いて、日本史専攻のカナダ人留学生が三万人を超える聴衆を前にして、この句を紹介し

ました。

学び舎を巣立つ我々は、芭蕉の
ように旅立つまでにお世話になっ
た周囲の方々に対して、感謝する
気持ちを常に忘れず、新たな旅に
向かおうではありませんかとスピ
ーチしたのです。

これこそが皆さんが培ってきた
品性から生まれる思いやりの心な
のではないでしうか。皆さんも
芭蕉と同じように、今まで支えて
くれた家族や友達、そして先生方
をはじめとする他者への気持ちを
忘れず、新たなステージへ旅立つ
て欲しいのです。

そこでは、本校で培った学びを
活かし、自らの個性を輝かせると
確信しています。その時に忘れな
いで欲しい三つの言葉があります。

「ロゴス、エトス、パトス」

これは、古代ギリシヤの哲学者アリストテレスが人を動かすために、重要であるとした三つの要素です。ロゴスは論理、エトスは信頼、パトスは情熱です。

ロゴス、何事にも論理的に考え、説明する。但しエトス、相手に信頼される品性を持って。そしてパトス、情熱を忘れず、自分の信じる道を突き進む。この三つのことを心に、皆さんの良さを世界に発信していただくさい。

そして、皆さんが成蹊での学びを持ち続けるために、ある作家の言葉を最後に贈ります。

『君のポケットには何がありますか。』
「新しい世界に早く飛び込み

たい」「まだ卒業したくない」という声が聞こえるかもしれない。』

それが皆さんの今の気持ちかもしれない。そこで、作家はこう続けます。

『君のポケットに簡単に大人を入れたい。君のポケットには、夢が、希望が、音楽が、フアツションが、周りを見てくださいます。皆さんが大好きな友達の笑顔も入っているはずだ。そして、悩みや、口惜しさや、ため息や、涙も、ちゃんとあるはずだ。実はそれが一番大切なものなんだ。それらを手離さずに、新たな世界に旅立って欲しい。何でかって。世界に一人しかいない君。そのポケットにあるものこそが、新しい世界の可能性に繋がるからだ。』

そんな素晴らしいポケットを持つている皆さんに、私からお願いがあります。たまには学校に戻って来て、皆さんのポケット一杯に詰まっていたいろんな話を、私達に聞かせてくれませんか。

結びに、本日この晴れの舞台に立つ三一九名が無事卒業することができましたのは、卒業生や本校だけの努力では決してありません。今画面を見て頂いている保護者の方々、成蹊学園の関係者及び成蹊会の皆様、そして地域の方々が本校の教育活動を理解し、卒業生に對してご支援・ご協力を頂いた賜物であり、心より感謝申し上げます。次第です。

ここに、一人一人が成蹊高等学校第七三回卒業生としての誇りを

胸に、本校を心の支えとして歩む
ことを期待し、校長告辞といたし
ます。

令和四年三月五日

成蹊高等学校

校長 仙田 直人